

悪寒・表裏の話

前回(vol.3)は『証』について主に「虚・実」の考え方をご紹介した。

『証』は、診断の指針となる概念でありいくつか分類され、虚実以外に「表・裏」及び、「寒・熱」が存在する。「表・裏」、「寒・熱」についての考え方をご紹介しよう。

I. 表証・裏証について

漢方医学では、病邪(病気の原因とされているもの)は外部より体内に侵入すると考えられている。その病邪がどこまで体内に侵入したかということ「表証・裏証」という言葉で表現している。風邪を例にとると、まず風邪の初期症状(悪寒、頭痛、鼻炎)といった目に見える症状から、後期症状(発熱・関節痛)といった全身症状へと病気が進行する。

すなわち「表証」とは、病邪が表にあり、病邪が侵入して間もない状態(悪寒、頭痛など体表の症状)を指し、「裏証」とは、病邪が裏にあり、病邪が進行した状態(下痢、胃痛など体内の症状)を指す。また、表でも裏でもない「半表半裏」という病邪の位置も存在する。

II. 寒証・熱証について

急性発熱性疾患の場合に「寒・熱」の考え方が必要となる。

漢方でいう「寒・熱」は体温の低下や上昇を表しているわけではない。あくまでも患者様の主訴を重視し、高熱の場合でも悪寒が強ければ「寒証」であり、平熱の場合でも暑さを訴えていれば「熱証」である。急性疾患の場合、寒熱と表裏を併せて病邪がどこまで体内に侵入し、どのような状態で存在するのか両者を考慮して処方決定する。

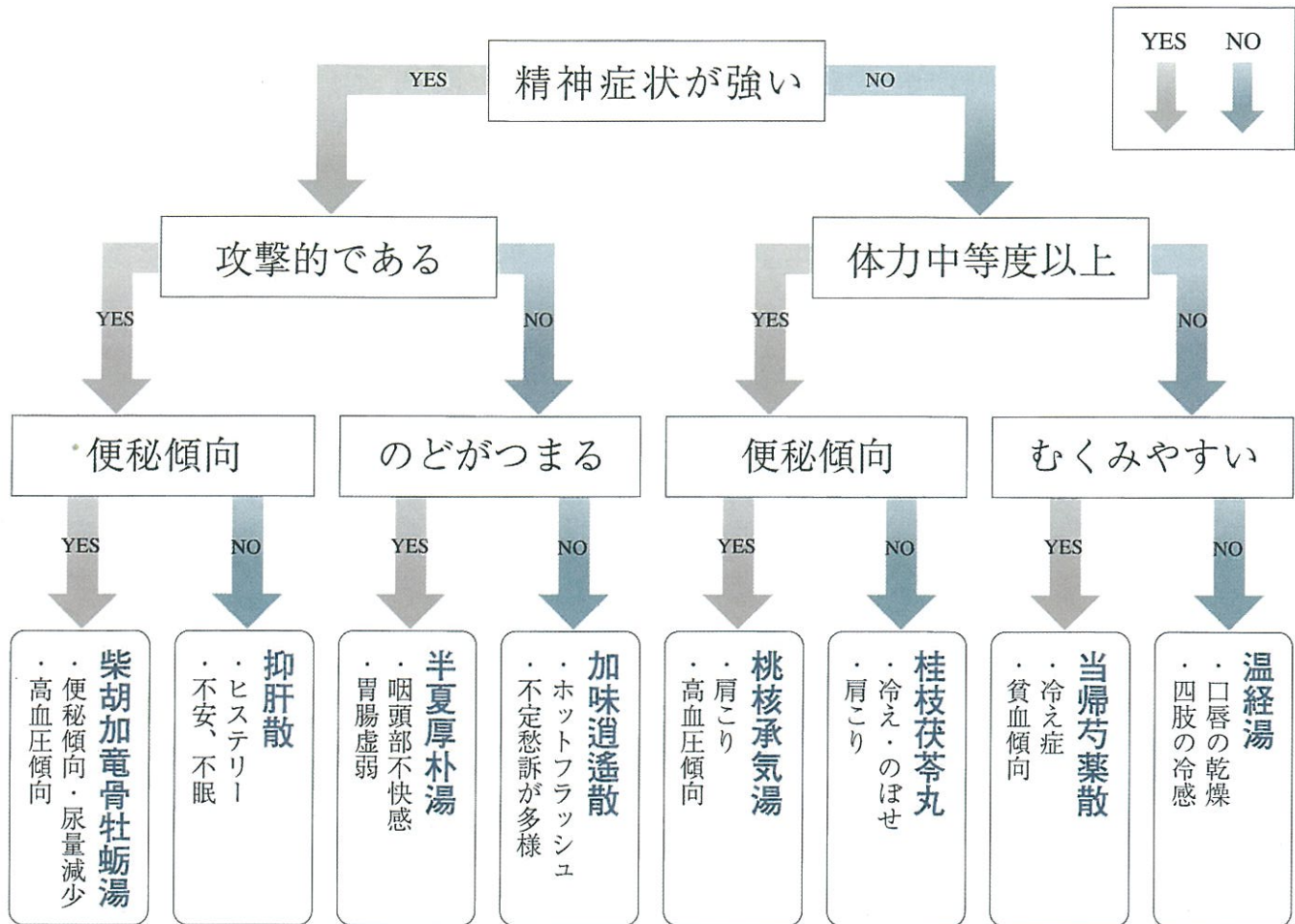
漢方は『証』の診断、すなわち患者様の主訴や体質などを観察、分析し、今までご紹介してきた陰陽・虚実・表裏・寒熱の概念を用いて、それぞれの患者様の病態に合わせた治療を行うオーダーメイド医療とも呼べるであろう。

● 小児の漢方治療 ●

薬の感受性が高い小児において西洋薬に不安を抱く人は数多く、漢方を治療に取り入れる割合が増加している。漢方での小児の薬用量について、通常は下記の用量を基準として適宜増減される。

7歳以上 15歳未満	……………	成人量の2/3
4歳以上 7歳未満	……………	成人量の1/2
2歳以上 4歳未満	……………	成人量の1/3
2歳未満	……………	成人量の1/4

漢方処方診断 更年期障害



▶ 漢方処方解説③

更年期障害はいわゆる不定愁訴の集まりであるため、イライラや不眠などの精神症状、食欲不振、動悸、頭重感、腰痛など、主訴や症状は人それぞれであり、統一した病名診断を行う西洋医学ではホルモン補充療法や精神安定剤投与などの治療法が試みられる。

漢方治療の第一段階として、桂枝茯苓丸、加味逍遙散、当帰芍薬散が最も処方されやすい漢方薬であり、これらの使い分けを理解するだけでも、かなりの治療効果をあげることが出来る。

この3処方の大まかな鑑別として

桂枝茯苓丸：実証タイプの人で、肩こりやのぼせ、手足の冷えなどを訴える場合に用いる。

加味逍遙散：ホットフラッシュや精神神経症状がみられ、訴えが多彩でその訴えがコロコロと変化する場合に用いる。

当帰芍薬散：虚証タイプの人で、めまい、動悸、むくみやすい、冷え症などを訴える場合に用いる。治療効果の判定には、4週間から8週間程度投与し、改善がみられなければ漢方処方の変更を考慮にいと良い。

漢方治療として、まずはこの3処方の使い分けを覚えていただき、さらに更年期障害の治療の幅を広げるために半夏厚朴湯や抑肝散や柴胡加竜骨牡蛎湯など、他の漢方薬を治療に取り入れるとよい。それにより治療の幅を広げるだけでなく、漢方の本質である患者様の病態にあわせた治療になる。